

王の心にしみたプディング 英国流のローストビーフ道

「ザーロイン・ステーキ」をめぐるエピソードについては、わが国でもかなり知られるようになった。

ころはジェームズ一世（在位、一六〇三〜一六二五）治下の英国で、ある日、王の食卓に上った「ロイン（腰肉）」がとりわけうまかったので、王がその名を聞くや、さっと腰の剣を抜き「本日より、汝をロイン卿と名づく」と仰せられたという民間伝承。

これに対し、同じ牛肉でも「ローストビーフ」にまつわるエピソードは、日本の「鉢の木物語」に似ていてはるかに情感があり、もし以下の話をご存じの向きがあれば、かなりな「通」といってよい。

時は「アーサー王伝説」に象徴される五世紀ごろ。

そのころ英国は、ヨーロッパ西北部からイングランドに侵入したアングロ・サクソン族によって、圧制と苦難の日々を送らされていた。

そんなある日、王は、数人の騎士とともにヨークシャー地方を旅し、とある農家に泊めてもらった。が、そこは、王の食前に出す牛一頭もない貧しさ。

主人は、家にあるだけの小麦粉と、タマゴ、牛乳で蒸したプディングを作り、くりかえし

客人に「牛肉を出せない非礼」をわびた。

数年ののち、ブリテン島の大王となったアーサー王は、ふと、ヨークシャーの片田舎の貧しい農民のことを思い出し、一日、都に招いて恩返しをすることにした。

その夜の宴会のテーブルには、とびきり大きな牛のローストと、あの夜、貧しい主人が作ってくれたものと同じプディングが添えられていた。

アーサー王は、それを前にして、これから後、ロースト・ビーフを口にするときには、必ずこの「ヨークシャー風プディング」を添えるようにと宣言した。

英国では、ロースト・ビーフには、今でもこの伝統が守られている。

